

機関番号：33908
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20530493
 研究課題名(和文) 情報弱者のかかえる諸問題の発見とメディアのユニバーサル・デザインのための基礎研究
 研究課題名(英文) Detecting problems around securing information for information-handicapped and universal design for media
 研究代表者
 益子 英雅(MASIKO HIDENORI)
 中京大学・国際教養学部・教授
 研究者番号：50329653

研究成果の概要(和文)：

障害者は気の毒な存在で、専門家による保護が必要だとされてきた。しかし、障害学周辺が提唱するとおり、弱者における社会生活上の困難とは、その能力不足自体に起因するのではなく、システム上の欠陥の産物である。だれにでも利用しやすい情報のあり様＝「ユニバーサルデザイン」が必要とされているのだ。本研究は、情報弱者が困難を経験する機会・構造を、網羅的かつ多角的に把握・整理するための基礎作業をおこなった。

研究成果の概要(英文)：

Disabled people have long been regarded as an object of pity. But according to the paradigm constructed in disability studies, difficulties the socially "weak" confront in everyday life do not arise from their lack of ability, but from a social system with defects. This fact partly implies that universal design or securing of easily accessible information for everyone is necessary. In this research social structures or occasions which the information-disabled encounter have been comprehensively identified and described to lay the foundation for further research for securing information accessibility.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：ユニバーサルデザイン・情報保障・言語権・コミュニケーション・メディア

1. 研究開始当初の背景

近年とりざたされる「情報弱者」ないし「情報格差」といった話題において、あたかも自明のようにイメージされているのは、「情報

≒コンピュータ関連」、「弱者≒技術革新に(経済的・能力的条件などから)遅れがちな層」といった想定である。これは、情報科学の主流部分が情報工学系に握られており、「より完璧な技術が開発・整備され定着して

いくなら、家電製品のように大衆全体に福音がもたらされる」といった夢想＝現代の神話と密接に通底している、とおもわれる。いわゆる「ユビキタス社会」が到来することで、これまで不便をかこってきた諸問題は雲散霧消するといった SF 的な未来像である。しかし、以下にのべるとおり、さまざまな次元・要因によって、現在のような技術革新の方向でだけ開発がすすめられ、予算等も投入されていくとしたら、うえにのべたような「SF 的未来像」とは似ても似つかない、いびつな世界がやってくるだけだとかんがえられる。現在の通信・複製・計算技術の進展が基本的に望ましいものであり、その小型化・低価格化・複製化が進むことが利便性・快適性をみたまのものであっても、以下にのべたような諸問題をとりこまない技術は、格差をちぢめることなく拡大をもたらすだろう。本研究は、狭義の情報科学の基礎研究ではなく、広義の情報・媒体理論 (information/media theory) の基礎研究にして、かつ利用者主権の実現のための諸問題の整理を行おうとするものである。ただし、それは一般理論をめざすものではなく、われわれにとって当事者性がつよく、直接的な課題が目前にある、日本列島の言語状況、おもには日本語関連の情報・媒体の諸課題を具体的素材とする。日本語の利用者のなかで、情報弱者にあたる層の不利益をへらす方向性の追求が、万人の利益にかない、それは日本社会全体のコスト軽減につながるとかんがえられる。それはことば、日本語、多様な情報媒体など、メディアのハード/ソフトすべてをユニバーサル・デザインするという形をとることになる。

2. 研究の目的

(1) 視覚・聴覚障害などがかかえる層が情報弱者であることは容易に推測されるが、実は様々な次元で、その不利益は放置され、生活情報ほかを入手することをこぼまれている。いわゆる「健常者」がきづく範囲・やれる範囲で、つまりは「特別サービス」のような扱いで対応がなされるが、それ以外は当然のように黙殺される構造がまかり通っている。例えば、現在では電車・バスなどでの音声案内および電光掲示板による指示などがあたりまえになってきたが、そのいずれか、あるいは双方が欠如した公共交通機関はまだたくさんある。列車事故・天候不順などによるダイヤの遅れについて、場内アナウンスがなされることはあたりまえだが、それが文字情報として保障される保証はない。また、家電製品や洗髪用シャンプーの容器などに点字表示がほどこされるようになったが、それがないものは多くあるし、説明書などが目でみてよめるという条件を当然みだしていることが前提で商品がパッケージされてい

ることは、ごく普通である。このことは、次項の広義の非識字層の情報隔離と通底するものがある。なにより、書籍・新聞・雑誌・テレビなど、目でみてよめる、オトがきけて音声日本語がわかる、といった条件を、利用者が当然備えているだろうと想定しきった媒体は多くある。そして、これら書籍・新聞・雑誌・テレビなどを利用できない限り、「情報上の孤島」にとり残されることは確実である。インターネットはおろか、より基本的な媒体の情報提供を利用できない層は予想外に多い。例えば、視聴覚器官が加齢・病気などによって衰えてきた高齢者、中途失明者・中途失聴者など、多くが障害者手帳をもたず、厚生労働省や地方公共団体が「障害者」として把握していない層、近隣の住民や政官財各界にとって完全に死角にある層が相当数潜在している（ここには少数言語話者である者も含まれる。次々項参照）。むしろ問題が複雑かつ深刻なのは、中途失明者/失聴者や、弱視者・難聴者など、「境界線」領域に属する層（厳密には「連続体」）、そして重複障害である「盲ろう者」あたりといえる。課題の整理を早急に進めるべきところは、こうした点である。

(2) 表音的な文字体系で正書法ができていても、機能的識字といった水準でみていくと、十分な文字生活をおくれているとはいえない層が残ってしまうことが経験的に知られている。ましてや、世界でも突出した恣意性・多様性をかかえる日本語の漢字表記は、障碍だらけと行ってさしつかえない。端的に言えば、幼児・外国人・移民（ニューカマー・オールドカマー）もふくめて、公教育からこぼれた層を完全に排除した表記水準が放置・黙認されているとあってよい。いいかえれば、ふりがな・英語・ポルトガル語等の併記がなされていない文書は、「おとなの日本人以外、おことわり」をいつているようなものである。

また、安易に急造がくりかえされてきたカタカナ語の機能不全は、その表記の不安定さや、略語の氾濫などもあいまって、日本人だけでなく、かながきがそれなりによめる層にとっても、さまざまな不適応をひきおこしているとかんがえられる。そして、わすれてはならないのは、知的障害者の「読書権」である。これは、幼児と問題が通底するが、「複雑でない音声日本語がわかり、複雑でない書記日本語がよめるが、成人の平均像に要求されている文章は読解困難」という層についてまわる問題である。表現のユニバーサル・デザインという観点からすれば、「わかりやすさの本質」（野沢和弘『わかりやすさの本質』NHK 出版 2006）は、徹底的に追求すべき課題である。

(3) 前々項であげた「ろう者」は、ろう者集団というネットワークにとどまるかぎり、単なる少数言語話者の共同体員にすぎない。しかし、大言語にとりかこまれた少数言語話者が、生地であれ移民さきであれ、孤立した少数言語ネットワーク内で日常生活をまっとうすることは困難である。自室などで同胞から介助されている高齢者や重度障害者などはともかくとして、普通の生活者は、周囲の大言語話者たちと意思疎通しないことには、たちいかない。

その意味では、ろう者は日本手話と書記日本語のバイリンガル生活層とよいうのだが、かながきは、完全に文法的にことなる音声日本語を基盤としているし、表意性がたかく手話と親和性がたかいとみなされてきた漢字も、その実、非常に恣意性がたかいために、ろう者の相当部分が不適応をおこしていると推定される。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者・分担者を中心としてたちあげられる予定のメーリングリストで恒常的に研究過程の情報を共有する。同時にウェブサイトを独自に構築し、本研究の成果の発信をおこなう。

(2) 定期的に研究代表者・分担者・研究協力者による研究会を開催し、各人に割り当てられた小課題に関する調査・研究の進捗状況報告、研究内容の相互批判をおこなう。この研究会は、過去におこなってきた共同研究への参加者（専門誌『社会言語学』への執筆者）や、近隣分野の研究者・大学院生にひろく公開される。研究会においては、関連テーマをあつかう研究者・大学院生の研究報告を行い、議論に広がりをもたせることができるよう、報告者の公募・発掘をおこなう。

(3) 研究過程で一次資料および二次・研究文献を網羅的に収集し、文献目録集として研究成果とともに公刊する。

(4) 関連学会において、順次個別に研究成果を報告する。また論文として公刊された論文は別に研究成果報告書として一書にまとめて印刷し、とくに研究者以外・学界にもひろく無料頒布する。その際には、視覚障害者など当事者がアクセスしやすいような発信形式をとることに留意する。

4. 研究成果

本研究が設定した目的にしたがい、メディアのユニバーサル・デザイン化を達成するにあたって認識が前提となる課題の多面的な析出がなされたことが本研究の成果である。障害学、日本語・英語教育学、社会言語学、図書館学などの関連研究者・関連機関職員を集めた本科研研究会（情報保障研究会）が6

度にわたって開かれ、報告・検討をつうじて問題の整理がなされた。その成果は本研究会が中心となって発行した専門誌『社会言語学』をおもな舞台として公表された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計15件）

- ① 塚原信行「言語能力概念と多文化共生－『福井市営住宅入居事務取扱要項』をめぐる問題を手がかりに」『社会言語学』別冊1号、2011年、215-221（査読あり）
- ② 打波（古賀）文子「知的障害者への情報のユニバーサルデザイン化に向けた諸課題の整理」『社会言語学』別冊1号、2011年、5-20（査読あり）
- ③ 東弘子「「情報提供」から「情報保障」へ」『社会言語学』第10号、2010年、201-214（査読あり）
- ④ 糸魚川美樹「法廷通訳に求められる正確性のかたられかた」『社会言語学』第10号、2010年、71-86（査読あり）
- ⑤ 仲潔「学習者を（排除）する教授法「客観的な」教授法への批判的まなざし」『社会言語学』第10号、2010年、87-108（査読あり）
- ⑥ あだち ゆーこ「第二言語としての日本語教育のかかえる問題」『社会言語学』第10号、2010年、183-200（査読あり）
- ⑦ あべ・やすし「日本語表記の再検討 情報アクセス権／ユニバーサルデザインの視点から」『社会言語学』第10号、2010年、19-38（査読あり）
- ⑧ なかのまき「書字教育と書写教育 書写・書道教育の社会言語学序説」『社会言語学』第10号、2010年、1-18（査読あり）
- ⑨ 山内薫「公立図書館での読み書き支援サービス」『社会言語学』第10号、2010年、39-54（査読あり）
- ⑩ 仲潔「言語観教育の展開」『社会言語学』第9号、2009年、113-138（査読あり）
- ⑪ あべ・やすし「言語という障害」『社会言語学』第9号、2009年、233-252（査読あり）

- ⑫ 打波 (古賀) 文子「障害者と情報アクセシビリティに関する諸課題の整理」『社会言語学』第9号、2009年、1-16 (査読あり)
- ⑬ ましこひでのり「日本語ナショナリズムの典型としての漢字論」『社会言語学』第8号、2008年、91-110 (査読あり)
- ⑭ 仲潔「言語観教育序論 ことばのユニバーサルデザインへの架け橋」『社会言語学』第8号、2008年、1-22 (査読あり)
- ⑮ なかのまき「左手書字をめぐる問題」『社会言語学』第8号、2008年、61-76 (査読あり)

[学会発表] (計9件)

- ① 足立祐子「移民教育に対応できる日本語教育とは」アジア・ヨーロッパにおける移住者と受入住民の共通言語教育研究会 (新潟大学) 2011年3月3日
- ② 塚原信行「ラテンアメリカ系移民家庭における母語維持」愛知県立大学公開学術講演会招待講演 (愛知県立大学) 2010年12月10日
- ③ 足立祐子「多様化する学習差に対応できる日本語教師について」(共同発表) 日本語教育学会国際大会 (台湾・国立政治大学) 2010年8月1日
- ④ かどやひでのり「言語政策課題としての情報保障 援助論からみた「LL本」運動」日本語政策学会 (関西大学) 2010年6月10日
- ⑤ 足立祐子「移民の言語教育と教師の役割」アジア・ヨーロッパにおける移住者と受入住民の共通言語教育研究会 (京都大学) 2009年6月27日
- ⑥ 足立祐子「多文化コミュニティを支える多言語活動」(共同発表) 2009年度異文化間教育学会 第30回大会 (東京学芸大学) 2009年5月30日
- ⑦ 足立祐子「ドイツ・韓国・日本の移住外国人に対する社会統合施策—言語施策を中心として—」(共同発表) 移民政策学会研究会 (早稲田大学) 2009年3月21日
- ⑧ 足立祐子「相互コミュニケーション活動を目的として学習素材作成」(共同発表) 日本語教育学会国際大会 (釜山外国語大学) 2008年7月12日

- ⑨ 足立祐子「異文化間教育学における日本語教師とその教師の資質」(共同発表) 2008年度異文化間教育学会 第29回大会 (京都外国語大学) 2008年6月1日

[図書] (計5件)

- ① ましこ・ひでのり『知の政治経済学—あたらしい知識社会学のための序説』三元社、2010年、401ページ
- ② かどやひでのり・あべやすし編著『識字の社会言語学』生活書院、2010年、372ページ
- ③ 東弘子「外来語の「ゆれ」にみるインターネットWebサイト上の日本語」『日本語学最前線』和泉書院、2010年、529-546
- ④ ましこ・ひでのり「現代日本の言語政策をかんがえるにあたって」田尻英三・大津由紀雄 編『言語政策を問う!』ひつじ書房、2010年、103-132
- ⑤ 仲潔「国際離婚に伴う言語問題: 制度的問題点と言語観を中心に」河原俊昭、岡戸浩子 (編著)『国際結婚: 多言語化する家族とアイデンティティ』明石書店、2009年、75-97

[その他]

ホームページ等

「社会言語学」刊行会
<http://www.geocities.jp/syakaigengogaku/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

益子 英雅 (MASIKO HIDENORI)
 中京大学・国際教養学部・教授
 研究者番号: 50329635

(2) 研究分担者

東 弘子 (AZUMA HIROKO)
 愛知県立大学・外国語学部・准教授
 研究者番号: 50336666

糸魚川 美樹 (ITOIGAWA MIKI)
 愛知県立大学・外国語学部・准教授
 研究者番号: 10405152

角谷 英則 (KADOYA HIDENORI)
 津山工業高等専門学校・一般科目・講師
 研究者番号: 90342550

仲 潔 (NAKA KIYOSI)
 岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：00441618

塚原 信行 (TUKAHARA NOBUYUKI)
京都大学・高等教育研究開発推進機構・
准教授
研究者番号：20405153

足立 祐子 (ADATI YUKO)
新潟大学・国際センター・准教授
研究者番号：00313552

(3) 研究協力者

あべ やすし (ABE YASUSI)
自立生活センター・登録介助者
研究者番号：なし

打波 (古賀) 文子 (UTINAMI (KOGA) AYAKO)
国立障害者リハビリテーションセンター
研究所・障害福祉研究部・流動研究員
研究者番号：30551585

田中 邦夫 (TANAKA KUNIO)
元国立国会図書館・職員
研究者番号：なし

なかの まき (NAKANO MAKI)
大学共同利用機関法人人間文化研究機
構・国立国語研究所・研究員
研究者番号：30569778

山内 薫 (YAMAUTI KAORU)
東京都あずま図書館・職員
研究者番号：なし